

一般演題1-6

減圧症が疑われHBOを施行したが硬膜内くも膜のう胞による症状であったと考えられる一例

小野寺慧洲 長谷徹太郎 森本裕二

北海道大学病院 麻酔科

症例は、60歳台男性。1か月ほど前から右足が上がらないことを主訴に受診された。40年来の潜水夫で、毎年、冬季には右下肢の力の入りにくさを自覚していた。受診1か月前から2週間も潜水を繰り返していた。X-3年9月にも下半身の動かしにくさがあり、6回の高気圧酸素治療で改善した既往がある。受診時には最終潜水から2週間以上経過しており、気泡の残存の可能性は低いと考えられたが、右足の運動障害が持続しており、除外診断は十分でないが、4日間のHBO治療を行った。X+4年4月、右足の脱力の悪化を認め、近医整形外科を受診。MRIで胸椎を圧迫する病変が認められたが、手術は困難と判断された。自己判断で、同年8月当院脳神経外科を受診。硬膜内くも膜のう胞の診断で、同年11月に手術が行われた。術後は症状の改善が認められた。減圧症患者においては、その病歴と症状から、治療の適応が決められることが多い。症状を繰り返す症例では減圧症以外を疑い、画像検索も必要になると思われた。